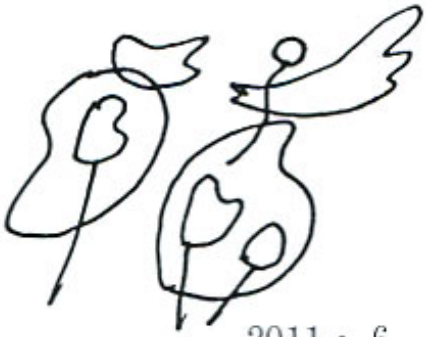
空
平成23年6月15日発行　第9巻第3号　通巻第37号

空



2011・6
SORA　37号

地底

柴田佐知子

羽抜鶏怒り収まるまで走る

一切を断ちて山椒魚の貌

地底など知らぬ知らぬと蝉しぐれ

汗の子の家路といふも遊びつつ

意のままに伸び捩花となりにけり

沸く前の空気の粒や目借時

蟇穴を出て筮竹をさばきけり

夕桜逢ひたくなれば来るがよい

堂裏はみどりの崖や御開帳

み仏は裾より煤け御開帳

佐谷・建正寺

—「俳句研究・夏号」より—

PDF= 俳誌の salon

また一人手を引かれ来る御開帳

村中の男の子は力士春まつり

御開帳咽せて堂より出てきたる

遊びたる衣吊るせば花の山

磔の姿に鶴の帰りけり

声出さばくじけてしまふ葱の花

玄海の紺もて荒るる旧端午

矢車の光となりて音高し

戦陣のごと崎に立つ武者幟

鯉幟ときに尾鰭を打ち合へり

晴れ渡る峰を目指して鮎上る

文字の海ひろがつてくる青葉の夜

別れたる髪ねんごろに洗ひけり

PDF= 俳誌の salon

雨のあと

高倉和子

御開帳煙の中に始まれり
十一面観音一面は花へ向く
堂裏の風の荒びや夕桜
約束を違へしままの春愁ひ
ゆつくりと動く母ゐて立夏かな
万緑の中に押し出す車椅子
連山を引き連れてゐる鯉幟
まつすぐな目をして草矢打ちにけり
雨のあと筍山の盛り上がる
今日無事に過ぎしと母や夏の月

PDF= 俳誌の salon

謝して消す灯

中田みなみ

放哉終ひの居にて二句

花冷や昔の音で鳴る時計

放哉忌暮れ切るまでの窓の海

夢二旧居

亀鳴くや開けたくなりし小抽出し

椿落つ夢二嫌ひは母ゆづり

牛窓

潮待ちの廓名残や春蚊鳴く

花豌豆逃ぐるを知らぬ島の猫

目借時張り子の虎の首動き

夏めくや黄昏長き並木坂

ままならぬ人ら偲びつ更衣

謝して消す灯五月となりにけり

PDF= 俳誌の salon

箱庭の真中

荒井千佐代

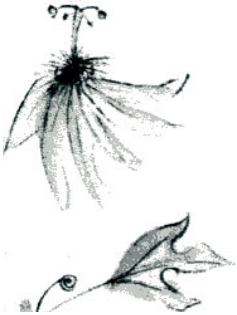
結ひ了へし合はせ鏡に落花かな
浅蜊めし父母亡き家の梁軋む
沈丁の香と玉砂利を踏む音と
傾ぎぶり佳き黒松や柏餅
箱庭の真中にちちとははが立つ
漣のたどり着きたる浮巣かな
金魚どち歪みし我を見てをらむ
滝しぶき時に神馬のたてがみに
夏蝶に蹤かば海峡見えて来し
聖堂に潮の匂へる日傘閉づ

PDF= 俳誌の salon

地震の海

服部早苗

地震の海知り尽したる桜鯛
海に逝きし村な忘れそ帰る雁
攫はれし鳥の巣箱もなにもかも
囀や海岸線は癒えをらず
春荒れの草生す大地余震また
地震いまだうすくれなゐに木の芽山
春田打かなはぬ大地熟視する
身の内に地震の予知ありさくら時
わが胸の紫雲英田一枚谷折りに
晩春を影もてよぎる鳶のこゑ



PDF= 俳誌の salon

御開帳

秘仏堂覆ひてしだれ桜かな
開帳や香煙洩るる花頭窓
接待に一村こぞる御開帳
子が曳いて村々めぐる花御堂
義捐箱しかと置かれし花の山
花屑を咥へて鯉の浮き上る
裏作の絶えし年月花薺
いまも呼ぶ古き町の名燕来る
ぎしぎしや農婦が通ふ廃線路
堰落つる水音に春を惜しみけり

柴田志津子

PDF= 俳誌の salon

更衣

だいじみどり

すかんぽのいまもすつぱし姉妹
椶の芽をよろこぶ妹は寡婦
いろいろの殊に黄色の袋掛
崖に手をかけ蕨野をのぞく
こでまりのおいでおいでとゆるるから
荷物提げめまとひに首振つてをる
梵妻の筍を掘るロング・スカート
狙はれて差出す阿呆春の風
やつとこさ届きし屋根にあやめ葺く
晩春やさかさまつげの目をこする
なるやうになるうつしよの更衣

PDF= 俳誌の salon

空作品評

柴田佐知子

たかんなや向かう山から猿の来て　宮井　知英

「たかんな」は筍のこと。猪に筍山を荒された話はよく聞く。私も見たことがあるが、柔らかいところを食べ散らしていた。猿も筍は好物で、器用に皮を剥いて食べるとか。そろそろ筍が出た頃だろうとやってきたのである。猿の貌や姿がユーモラスに見えてくるのは、「向かう山から猿の来て」という言葉遣いの軽妙さによるものだろう。何度読んでも可笑しい。「たかんなや」という上五の置き方もうまい。

風船をつま先で蹴る膝で突く　高倉恵美子

ふわっと落ちてきた風船をつま先で掬うように蹴り上げる。右手も左手も膝も…体すべてを使い途切れないようにつく風船。「つま先で蹴る膝で突く」という軽やかなリズムが見事に生きている。

両国のざんばら髪やつばめの子　山田　正子

両国と言えば国技館と、東京には遠い私でもすっと繋がる。あたりには相撲部屋も多い。掲句のざんばら髪の主はまだ髪が伸び揃わず、髷が結えない若い相撲取りであろう。それにしても「両国のざんばら髪」という単純にして鮮明な措辞が何とも魅力的だ。すくすく育つ「つばめの子」との取り合わせも生き生きとした効果をあげている。

鞦韆を漕ぐぞ影法師付いてこい　小林　朱夏

「鞦韆（しゅうせん）」は春の季語。中国で冬至から一〇五日目の「寒食（かんしょく）」の日に、宮殿で官女が「鞦韆」で遊んだことから春の景として詠まれてきたもので、「ぶらんこ」「秋千（しゅうせん）」「ふらここ」「ふらんど」「ゆさはり」「半仙戯（はんせんぎ）」とも言う。ぶらんこは公園等に一年中あるが、伝統的な季感がこの季語の軸となっている。勢いをつけぶらんこを高く漕ぐ元気な子供の姿が「影法師付いてこい」という自在な表現で詠みとめられている。同じ作者の〈番犬のむだ吠えばかり子供の日〉も楽しい。類想のない「子供の日」の作品である。（以下略）

PDF= 俳誌の salon

空集

柴田佐知子選

春の夢彼岸此岸を行き戻り
桷の花ずり落ちさうな行者径
如月や錫杖の音山に消ゆ
翻る黒は僧なり橡若葉
青芝や遊び疲れし髪匂ふ
武具飾る張子の虎を殿に
母のもの母のごと着て更衣
目刺買ふ渡船の銅鑼に急かされて
春宵や楽章変る指揮者の背

糸田　宮井知英

福岡　柴田志津子

ゆく雁や疣神に借る石ひとつ
しづの女の棲みしはここら桑の花
くぼみたる俎板削る夏隣
手をついて覗く古井や苔の花
手を引かれ泣いてゆく子や立葵
自転車を止めて加はる春焚火
たんぽぽとともに息して風になる
水音は犬ふぐり咲くあたりより
つばめ来る農学校に深き井戸
末娘嫁ぎゆきけり夕桜
はるかより来る白波や灌仏会
天守へと吹きのぼりたる花びらよ
雨粒に紅増す寒緋ざくらかな
無一物に笑みて在せり立雛

羽犬塚　織田高暢

福岡　矢野百合子

PDF= 俳誌の salon